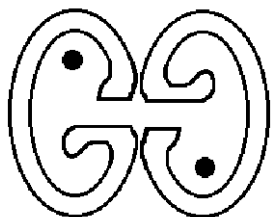


日本双生児研究学会ニュースレター

《第37号》



Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2005年8月発行

目次

日本双生児研究学会第20回学術講演会のご案内	2
日時：平成18年1月28日（土）午前9時45分～午後5時	
会場：和光大学	
The Swedish Twin Registry – Past, Present, and Future ナンシー・ピーダーセン	4
講演レポート	加藤 憲司
「ボランティア・市民活動元気アップアワード こつこつ大賞」	天羽 千恵子 11
聖書における「双生児」 —その緒論的小研究—	志村 真 12
平成17年度第1回日本双生児研究学会幹事会議事録	17
平成17年度第2回日本双生児研究学会幹事会議事録	18
日本双生児研究学会平成16年度会計収支報告	19
日本双生児研究学会平成16年度会計収支予算案	19
次回研究会のお知らせ	20
編集後記	20

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00190-7-185311)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部安藤研究室内
日本双生児研究学会事務局
電話：03-3453-4511〔内線23109〕
FAX：03-5427-1578
E-mail：juko@msa.biglobe.ne.jp

日本双生児研究学会 第20回学術講演会のご案内

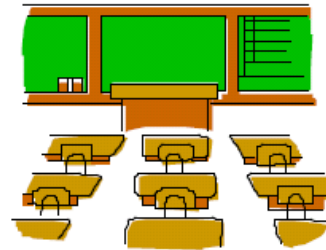
【日時】 2006年1月28日（土） 午前9時45分～午後5時

【会場】：和光大学（→【交通のご案内】参照） J301教室（予定）

〒195-8585 町田市金井町2160 電話：044-989-7777 内線4309（野中）

【プログラム(予定)】

- 9:00 受付開始
- 9:45 開会
- 9:50～11:50 一般演題(1)
- 13:00～13:30 総会
- 13:30～15:15 一般演題(2) もしくは特別講演(交渉中)
- 15:30～17:00 一般演題(3)
- 17:00 閉会(次期大会会長挨拶)
- 17:30～18:30 懇親会



一般演題(研究発表・報告)募集

今回の学術講演会は、前回の金沢と同様に、一般演題(各15分:発表12分、質疑3分を目安)の口頭発表を中心に構成し、1つの会場のみで行なうことを予定しております。育児支援関係のご報告も、この一般演題の中で行ないたいと思います。前回の金沢同様、多様な演題が多数寄せられますよう、みなさまのご参加・ご発表をよろしくお願いいたします。

- 発表・報告いただける方は、演題名、発表者名、全員の所属および発表要旨(600～1000字程度)を、A4用紙1枚にまとめて、郵便またはメールに添付してお送りください。なお、発表時に使用できる機材はPowerPointを想定していますが、それ以外の必要がある場合には申込み時にお書き添えください。

【締切り】 2005年11月7日(月) (必着)

【送り先、およびお問い合わせ】

〒195-8585 東京都町田市金井町2160

和光大学人間関係学部人間発達学科

(日本双生児研究学会第20回学術講演会大会事務局)

野中 浩一 宛

電話：044-989-7777 内線 4309 e-mail: nonaka@wako.ac.jp



【会費など】

参加費： 2,000 円（多胎児の会の方は 1,000 円） ※当日徴収させていただきます。

昼食（お弁当）代： 900 円程度 ※ご希望の方のみ当日販売。生協食堂も利用可能です。

懇親会費： 1,000 円（予定）

【交通のご案内】

最寄り駅は、小田急線の鶴川駅。新宿、渋谷、横浜の駅からの所要時間は 40 分ほどです（埼玉県の和光市ではありませんのでご注意ください）。キャンパスは鶴川駅周辺の商店街、新興住宅のあいだを抜け、徒歩 15 ～ 20 分。駅前からタクシー利用で 10 分弱（1000 円前後）。

《乗り継ぎ例》

- ★ 新横浜→（JR 横浜線）→町田→（小田急線各駅停車）→鶴川：実車約 40 分
- ★ 新宿→（小田急線急行）→新百合ヶ丘→（小田急線各駅停車）→鶴川：実車約 35 分
- ★ 渋谷→（井の頭線）→下北沢→（小田急線急行）→新百合ヶ丘→（小田急線各駅停車）→鶴川：実車約 40 分



《鶴川駅→和光大学》



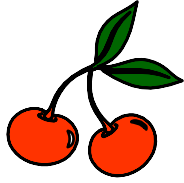
- ★ 徒歩の場合には、左の地図の点線に沿って歩きます。当日の朝には、分岐点に学生がご案内に立つ予定です。
- ★ タクシーを利用される場合には、鶴川駅の北口前にタクシー乗り場があります（大学へは迂回路をしますので、徒歩の経路とは異なります）
- ★ 次回のニュースレターで改めてご案内申し上げます。

【宿泊】

鶴川駅周辺にはじゅうぶんな宿泊施設がありません（「ホテルダイヤモンド」：町田市能ヶ谷町 191 電話 03-734-5550 小田急鶴川駅徒歩 1 分 25 室 シングル 7,100 ～、ツイン 13,200 ～）。大会事務局では予約の斡旋はしておりませんので、必要な方は主要ターミナル近辺などもご検討のうえ、各自でご予約いただくようお願いいたします。

The Swedish Twin Registry – Past, Present, and Future –

ナンシー・ピーダーセン教授講演レポート



スウェーデン王立カロリンスカ大学 加藤 憲 司

このニュースレターの読者の皆さんならよくご存じのように、スウェーデンには世界最大規模の双生児レジストリーがあります。その **Swedish Twin Registry** を統轄するディレクターであるナンシー・ピーダーセン博士 (Dr. Nancy Pedersen, カロリンスカ大学教授) が本年 2 月に初来日されたのを機に、日本双生児研究学会の第 21 回研究会として 2 月 12 日 (土) に慶應義塾大学三田キャンパスにおいて講演会が開催されました。本稿ではその講演内容の要旨をお伝えすることを通じて、**Swedish Twin Registry** の概要をご紹介します。筆者(加藤)は 2002 年 9 月からカロリンスカ大学大学院博士課程に在学し、ピーダーセン教授の指導のもとで双生児データを用いた研究に鋭意取り組んでいるところです。従って **Swedish Twin Registry** を読者の皆さんに紹介できることは、筆者にとって大変うれしく、かつ光栄なことと思っています。(なお、**The Karolinska Institute** は「カロリンスカ研究所」と訳されることが多いですが、本稿ではよりその実際の姿に近い「カロリンスカ大学」という訳語を採用します。)

(1) 双生児レジストリーが作られた背景

Swedish Twin Registry が設立されたのは 1950 年代後半にさかのぼります。当初は、喫煙と飲酒が癌と心血管疾患の発症に及ぼす影響を調べるうえで、遺伝的な背景(癌になりやすさなど)をコントロール(統制)するために、双生児の人たちを対象としたのが始まりです。ちなみにこの研究は、喫煙者が非喫煙者より肺癌の発症率が高いことを歴史上初めて示したことで知られています。その時作ったレジスターをいろいろな研究にも活用しようと、スウェーデン政府が管轄する癌や死因などの他の登録情報と結合することで、データベース群が徐々に構築・拡大されていきました(**register**(登録簿)を保管する場所が **registry** です)。このように集団を対象に、統計学的手法を用いて疾患等の原因や危険因子を研究する学問は疫学と呼ばれますが、北欧諸国のこうした国家政策としての各種登録制度は、疫学研究にとってきわめて価値の高い資源を提供しています。もともとはキリスト教会により教区の信者たちの名簿として 17 世紀ごろから整えられていきましたが、国家にとっては税金の徴収のために便利ですから、しだいに制度として定着していったのです。そしてスウェーデンでは現在、1947 年に導入された個人識別番号によって住民一人一人が管理されています。(筆者もこの番号を持っていますが、国によって管理されることの怖さよりも便利さの方がずっと大きいので、国民からの強い反発はありません。)

それでは、疫学研究における双生児データの価値とは何でしょうか。第一に、環境要因を理解するうえで優れた情報を与えてくれます。ご承知のように一卵性双生児のペアは基本的に同一の遺伝的背景を共有していますから、ペア間の相違はそれぞれの固有環境の相違に由来するとわかります。第二に、一卵性と二卵性の比較により、ある形質や疾患における遺伝要因と環境要因の相対的な重要性を推定することができます。本稿でもそうした研究の結果をのちほどいくつかご紹介します。そして第三には、二卵性双生児を用いることにより、形質や疾患に関連する遺伝子の染色体上の位置を知るうえでの有用な情報を与えます。ただしこの話題については今回は触れません。

これらの説明からわかるように、双生児研究では卵性を正しく診断することが決定的に重要で

す。Swedish Twin Registry では通常、二つの質問によって回答者の卵性を推定します。一つめは、よく知られた”two peas in a pod”と呼ばれる質問です。英語では pea (エンドウ豆) という単語を使いますが、スウェーデン語では「あなたたちは『二つの berry (野イチゴなどの果実) のように似ている』とよく言われましたか?」と表現します (日本語なら「瓜二つ」ですね)。前ページのタイトルの左下にあるシンボルマークは、この質問のキーワードである「二つの berry」をデザインしたものです。二つめの質問は、「あなたたちが小さいころ、二人をよく知らない人たちからどれほど頻繁に見間違われましたか?」です。これら二つの質問にペアの双方が「いつも」「ほとんどいつも」と答えたなら一卵性、そうでなければ二卵性、と判定します。Swedish Twin Registry の場合、これらの質問を使った卵性診断は DNA マーカーを用いた厳密な診断と 98% 以上一致することが確かめられており、この方法が大規模な集団の卵性診断に妥当なものであることがわかっています。

(2) Swedish Twin Registry のコホートとプロジェクト

Swedish Twin Registry には、1886 年以降にスウェーデン国内で生まれたほぼすべての双生児が登録されており、その数は 17 万人を超えます。ただし、研究を行う際には毎回そのすべての人々を対象とするわけではなく、それぞれの研究目的に応じて、いくつかのコホート、つまり生まれ年などの特定の条件を共有する人々の集団に分けています。本節ではまず、それぞれのコホートを順にご紹介しましょう。

① 1886～1925 年生まれコホート

Swedish Twin Registry の設立時に作られたコホートで、現在もご存命の方々は 80 歳以上になっています。1961～70 年にかけて、4 回の質問紙調査が実施されました。

② 1926～1958 年生まれコホート

国の人口レジストリーのコンピュータ化にあわせ、1958 年までに生まれた双生児が登録され、1972 年に質問紙調査が実施されました。また後述の SALT プロジェクトの核となるコホートでもあります。

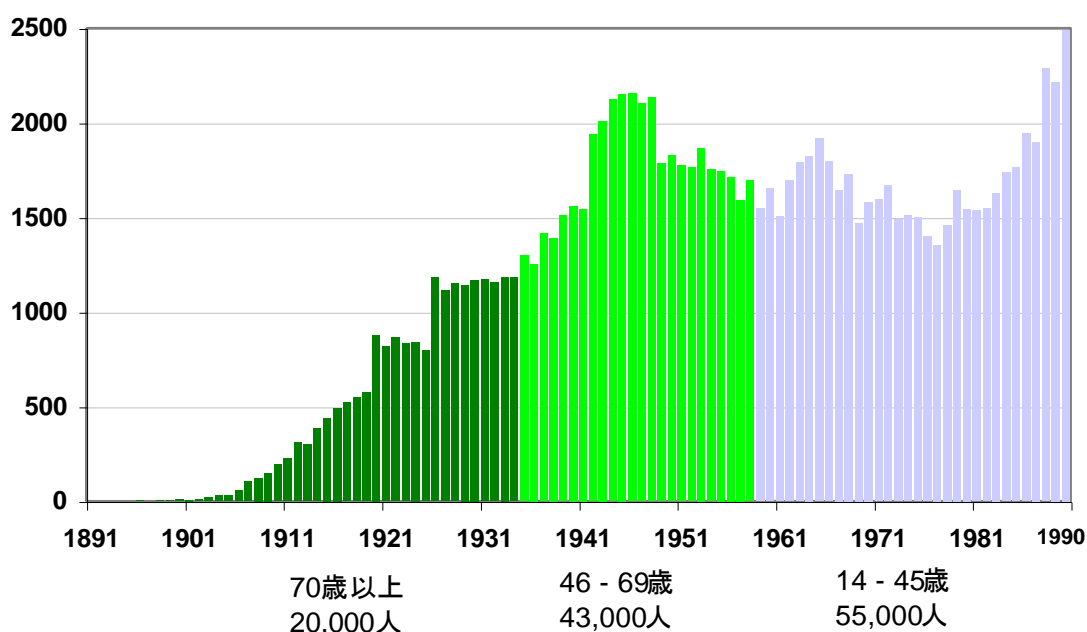
③ 1959～1985 年生まれコホート

1959 年以降に生まれた双生児の人たちには、ごく最近まで一度もコンタクトを取っていませんでした。現在、STAGE (Swedish Twin Study of Adults – Genes and Environments) というプロジェクト名のもと、インターネットを利用した大規模な調査が始まろうとしているところです。

④ 1986～2001 年生まれコホート

いちばん新しいコホートは CATSS (Child and Adolescent Twin Study in Sweden) プロジェクトと名付けられ、双生児たちが 9 歳および 12 歳になる年に親とコンタクトを取るという方法で順次拡大しつつあります。

図 1 : The Swedish Twin Registry の生年別登録者数 (1990 年まで)



次に、Swedish Twin Registry の各研究プロジェクトの紹介です。現在、およそ 30 にのぼる関連プロジェクトが稼動中ですが、そのうち代表的なものとして以下の四つが挙げられます。

① SALT (Screening Across the Lifespan Twin study)

1998～2002 年にかけて、1958 年までに生まれた成人双生児全員にコンタクトを試み、75% に相当する約 45000 人の参加者を得ました。コンピュータシステムを利用したインタビューは一人あたり数時間にもおよぶ非常に広範囲にわたるもので、現在、データ解析が精力的に進められています。次節④で紹介する慢性疲労・疼痛の研究はこのプロジェクトの一部です。

② SATSA (Swedish Adoption/Twin Study of Aging)

幼児期から別々に育った双生児ペア群とそれ以後も同居していた双生児ペア群とを、性別・年齢・出生地をマッチングさせて一つのコホートにした、世界でも類例のない研究プロジェクトです。1984 年以降 3 年おきに、質問紙調査と健康診断が実施されています。次節②で紹介する知能の年齢変動の研究はこのプロジェクトの成果の一つです。

③ TCHAD (Twin study of Child and Adolescent Development)

1985～86 年に生まれた双生児約 1500 ペアを対象に、児童・青年期の健康や行動における遺伝・環境の役割を調べることを目的とした縦断的プロジェクトで、1994 年以降これまでに 3 回調査が実施されました。次節①の ADHD の研究はここに含まれます。

④ TOSS (Twin Offspring Study in Sweden)

夫婦間や親子間における遺伝・環境の役割を調べる目的で、結婚して母親・父親となった双生児たちとその家族を対象としたユニークな研究プロジェクトです。現在、家族を含めて約 3000 人が参加しています。

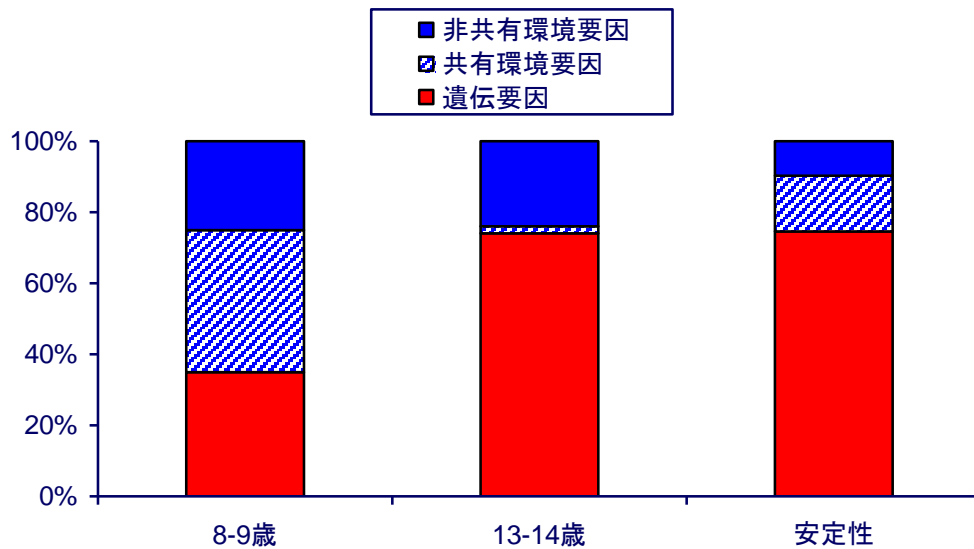
(3) 最近の研究成果の実例

それでは、Swedish Twin Registry の 40 年以上にわたる研究によって得られた数々の成果の一部をご紹介します。これらの研究は大きく分けて二つの方法論に基づくものと言えます。その一つは量的遺伝学に基づいて、遺伝と環境の相対的な重要度を推定するものです。遺伝

率 (heritability) を計算する場合に使われるのがこの方法です。もう一つは co-twin control study と呼ばれる疫学的手法で、一方がある疾患を持っていて他方が持っていない場合のように、その疾患に関して不一致 (discordant) な双生児ペアを調べることにより、どの因子がその発症に影響しているかの相対危険度を推定するものです。

① 縦断的解析の例：ADHD

図 2：8～9 歳および 13～14 歳時に測定した男児の ADHD 得点とそれらの得点間の相関における遺伝・環境要因の割合



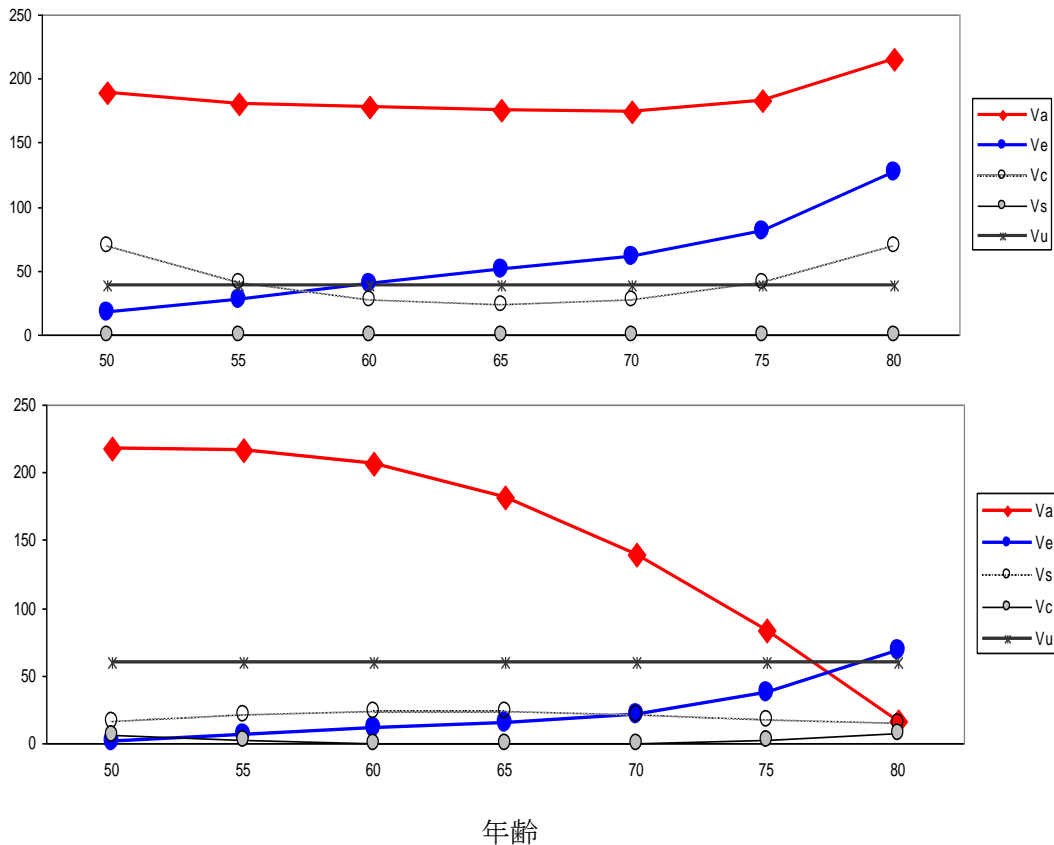
Steffenson et al. (1999). Int J Behav Dev
Larsson et al. (2004). J Am Acad Child Adolesc Psychiatry

図 2 は注意欠陥多動性障害 (ADHD) の症状の有無を調べるチェックリストを用い、1985～86 年に生まれた約 1100 ペアの双生児の親に二回 (1994 年と 1999 年) にわたって回答してもらった結果をもとに、それぞれの調査時の得点とそれらの相関における遺伝・環境要因の割合を男児について示したものです。この研究結果は、ADHD における遺伝的な影響の相対的割合が思春期の前後で大きく上昇すること、そして 2 回の測定時点間における得点の安定性に同一の遺伝子群が最も大きく寄与していることを示唆しています。

② 潜在曲線モデルを用いた解析の例：知能における遺伝影響の年齢推移

様々な年齢の人たちを対象に遺伝要因の影響を計算すれば、ある形質における遺伝の影響が年齢とともにどう推移していくかがわかります。特に高齢者の知的機能のように、年齢に伴う個人差の変動が顕著である場合には、分散つまり集団内における値のばらつきの大きさに着目する必要があります。下の図 3 は 50 歳以上の成人双生児の知能を 13 年にわたって繰り返し測定したデータをもとに、結晶性知能 (上段) および流動性知能と知覚速度 (下段) の分散を遺伝および各環境要因ごとに計算したものです。ここでは遺伝分散の推移 (◆で示した折れ線) に注目してください。

図 3：知能の遺伝・環境分散の経年変化（上：結晶性知能、下：流動性知能と知覚速度）



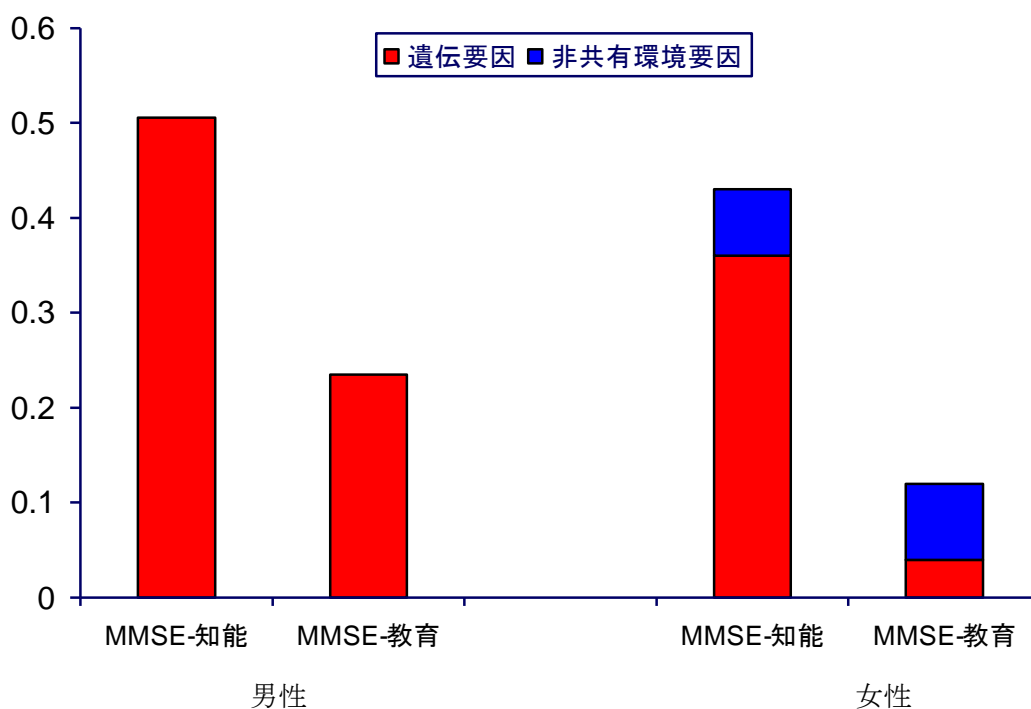
Reynolds et al. (2005). Dev Psychol

この図から、結晶性知能ではその分散のうち遺伝的影響として説明できる成分の大きさがほぼ安定しているのに対し、流動性知能と知覚速度では 65 歳ごろから遺伝的影響が急速に減少していくことが見て取れます。ただしこの減少が生物学的な理由によるものなのか、あるいは選択バイアス（重度の認知症の人たちが研究対象から除外されていることなど）によるものなのかは、議論の余地があるでしょう。

③ 多変量解析の例：知能・教育歴・MMSE

量的遺伝学の方法を二つ以上の形質に用いると、それらの形質間の相関を遺伝・環境要因に分けてそれぞれ推定することができます。ここではそのような解析の例として、50 歳以上の成人双生児約 290 ペアを対象に、認知症の検査法として広く用いられている MMSE (Mini-Mental State Examination) の得点と知能および教育歴との関連を調べた研究を紹介します。図 4 は縦軸に各変数間の表現型相関を取り、それらのうち遺伝・環境要因の影響による部分を色分けして、さらに男女別に図示したものです。知能と MMSE 得点は男女とも比較的高い相関を示し、その相関の全部または大部分がそれら二つの変数に共通する遺伝要因で説明できるのに対し、教育歴と MMSE 得点との相関はさほど高くなく、かつ遺伝的影響の程度が性別によって異なることがこの図からわかります。

図 4 : MMSE 得点と知能および教育歴との表現型相関における遺伝・環境要因の割合



Pedersen et al. (1996). J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci

④ 疫学的解析の例：疾患の危険因子としてのパーソナリティ

最後に、co-twin control study の例として、neuroticism (神経質さ) と extraversion (外向的さ) が疾患の発症にどのような影響があるかを、慢性疲労症候群 (CFS) と慢性疼痛 (CWP) についてそれぞれ調べた結果を下表に示します (これは筆者が第 11 回国際双生児研究学会 (デンマーク、2004 年 7 月) で発表した内容です)。これらの症候群は 100 人に 2~3 人程度が発症する比較的患者数の多い疾患であるにも関わらず、その病因が謎に包まれているため、専門家どうしの間でも議論が大きく分かれています。このようなケースこそ、多分に探索的な性質を持つ双生児研究法がその威力を大いに発揮する好例の一つと言えるでしょう。

ここでは、発症前 (1972~73 年) に測定した二つのパーソナリティ因子がその後の疾患の発症に及ぼす相対危険度 (オッズ比) を、(a) 遺伝的背景を共有しない罹患者-非罹患者群 (外部コントロール)、(b) 一方が罹患し、他方が罹患していない不一致な双生児ペア、および (c) 不一致ペアのうち一卵性のみ、の 3 群に分けてそれぞれ計算した結果を示してあります。オッズ比が 1 より大きいほどその疾患を発症する確率が高く、1 より小さくて 0 に近づくほど発症の確率が低い (つまり予防的に作用する) ことを意味します。そしてもし (b) のオッズ比が (a) の値よりも 1 に近ければ、危険因子と発症との関連は家族要因 (遺伝 and/or 共有環境) の影響を受けている (より正確に言えば、家族要因が交絡因子である) と考えられ、さらに (c) のオッズ比が (b) の値よりもっと 1 に近ければ、それらの関連は遺伝要因の影響を受けていると考えられます。下の表からは、neuroticism は慢性疲労・疼痛の発症の危険因子だが extraversion にはそのような関連がないこと、および neuroticism とこれらの症候群との関連は遺伝要因の影響を受けていることが読み取れます。こうした結果は、慢性疲労・疼痛の患者の多くが抑鬱や不安などの精神的症状を高い頻度で併発する仕組みを解明するうえで、有用な示唆を与えることが期待されます。

表：慢性疲労症候群 (CFS) および慢性疼痛 (CWP) の発症における neuroticism (神経質さ) と extraversion (外向的さ) の単位得点当たりの相対危険度 (オッズ比)。(a) 外部

コントロール、(b)不一致な双生児ペア、(c)不一致ペアのうち一卵性のみ。

	(a) External control	(b) Co-twin control	(c) MZ co-twins
CFS-neuroticism	1.55	1.62	0.92
CWP-neuroticism	1.46	1.37	1.15
CFS-extraversion	0.98	0.91	0.93
CWP-extraversion	1.02	1.03	0.89

Kato et al. (in manuscript).

(4) おわりに

以上、ピーダーセン教授の講演内容をお伝えすることで、**Swedish Twin Registry** のほんの概略ですが、ご紹介してきました。概略とは言え、日本語で書かれたものとしては最も詳しい **Swedish Twin Registry** の紹介になったのではないかと密かに自負もしています。

このほかに特筆すべきこととしては、**Swedish Twin Registry** が EU (ヨーロッパ連合) 各国の双生児レジストリーとともに参加している **GenomEUtwins** (ゲノム・イーユー・ツインズ) というプロジェクトが挙げられるでしょう。これは参加 8 か国 (オーストラリアを含む) のレジストリーが保有する合計 60 万ペアを超える双生児データを統合し、最新の分子生物学的技術を用いて様々な疾患や形質の遺伝子を同定したりメカニズムを探ろうというスケールの大きな試みです。ニュースレター第 35 号で安藤寿康先生がご指摘になったように、双生児研究とヒトゲノムプロジェクトの成果が結びつくことによって、医学・生物学領域の研究が今、大きく飛躍しようとしています。世界的に注目を集めている双生児研究に関し、日本においてもその意義が広く認識されるようになるために、本稿でご紹介したピーダーセン教授の講演が一つの契機になってくれれば幸いです。筆者自身も、非力ではありますが、留学を通じて得た知識や経験を日本の双生児研究のさらなる発展のために役立てたいと願っています。

末筆ながら、今回の講演をご企画くださり、また会場をご用意くださった会員の先生方、そして当日寒一中、足を運んでいただいた皆さんに、この場をお借りして謝意を表します。

※ 講演会終了後の記念撮影。写真中央がピーダーセン教授。後列で最も長身の人物が筆者。



「ボランティア・市民活動元気アップアワード こつこつ大賞」受賞のご報告

多胎児子育て支援グループ マミーベアーズ
天羽 千恵子

金沢での学術講演会で頂いた沢山の刺激の興奮も冷めやらぬ2005年1月29・30日に、「ひょうごボランティアプラザ」主催「第5回ひょうごボランティアスクエア21」が開かれ、その中に設けられた表題のアワードを、神戸市を中心に活動する「多胎児子育て支援グループ マミーベアーズ」が受賞致しました。

「こつこつコース」には79団体の応募があり、一次審査を通過した16団体が、今までの活動についてパネル展示と3分間のプレゼンテーションを行い、一般と審査員の投票を受け、マミーベアーズが大賞に選ばれました。録音図書のグループ、DV被害者支援のグループ、いのちの電話など本当に様々な活動団体の中からの受賞でした。

たった3分のプレゼンテーションでしたので十分な発表は出来ませんでした、パワーポイントを使い多胎妊娠・出産が単胎に比べ大変リスクの高いものであること、またその後の育児も物理的にも精神的にも大変負担感・孤独感の大きいものであること、しかし正しい知識や情報・仲間や先輩のアドバイスなどを得ることで、リスクや負担感を軽減できる可能性が大きい事などをお話しました。また、昨年11月にマミーベアーズ主催で「兵庫県内多胎関連グループ交流会」を開きましたが、兵庫県内に43もの多胎関連グループが存在することが判り、より有効な多胎支援の為にそれらのネットワーク化を図ろうとしていることも発表させて頂きました。

賞金20万円を頂きました。もちろんそれもととても嬉しいのですが、それよりも今までの活動を認めて下さった事、審査員の皆さんや一般の皆さんから「多胎の妊娠・出産・育児が極めてリスクの高いものだとはじめて知りました。」「そういう支援が必要だとは今日まで考えもしませんでした。」との感想を頂いた事をとても嬉しく思いました。

多胎支援はまだまだ一般には未知の世界のようです。ですから、このような公の場所で各地の皆さんが発信なさると、もっともっと多胎への理解・支援が進むと実感致しました。私達も、色々な機会を逃さずどんどん発信していきたいと思えます。日本双生児研究学会をはじめ先生方のお示し下さる資料が、その大きな裏付けとなります。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

末筆になりましたが、私達の小さな記事を見つけて下さり「ニュースレターに載せましょう」と嬉しいお誘いを頂きました今泉洋子先生、ご丁寧なメールを下さいました編集委員会の横山美江先生にお礼を申し上げます。

*この原稿を準備しておりました今日4月30日に、生活協同組合コープこうべ「虹の賞」事務局より「虹の賞」受賞の連絡がありました。この賞は、兵庫県下の自発的な市民活動発展の為に設けられた賞で、55件の応募の中からの受賞です。併せてご報告させて頂きます。

はじめに

昨秋のある夜、第 19 回大会会長の志村恵から電話があった。「今度金沢で双子学会があるから、お前も出て、何かしゃべれ。」文法的には「命令形」なのだが、その意味するところは「依頼」であると受け取った筆者は、『OK. じゃあ、聖書に出てくる双子のことでいいかな』と答え、かくして「余興」としての発表が企図された。

発表当日、筆者は出席者一同のどよめき?!を期待してスライドを用意していたのだが、思い違いから肝心のスライドをお見せすることができなかった。そこで、この機会をお借りして、掲載させていただきたい。『ニューズレター』36号で、安藤寿康先生が「ふたごの、ふたごによる、ふたごのための」研究について書いておられたが、そうした観点でご覧いただき、どよめいて?い



ただければ幸いである。

志村恵と志村真(2歳ころか)
筆者もどっちが自分だか分からない

1. 概 観

キリスト教教典『聖書』は、BCE. 13 世紀中頃から 2 世紀にかけて古代ヘブライ語（一部はアラム語）で書かれた『旧約聖書』と、CE. 1 世紀中頃から 2 世紀中頃にかけてコイナー（共通語）ギリシア語で書かれた『新約聖書』とによって構成される。単語「双子」は、ヘブライ語では「トームーム pl.」、ギリシア語では「ディデュモイ pl.」と言う。

『旧約聖書』に登場する「双子」は、創世記 25 章以下の「エサウとヤコブ」、38 章の『ペレツとゼラ』の 2 組である。単語「双子」は雅歌 4:5 と 7:4 にもあるが、これらは美しい女性の肢体（1 対の乳房）の文学的表現にすぎない。したがって、考察すべきは、「エサウとヤコブ」と「ペレツとゼラ」の 2 組の男子双子ということになる。

2. 『旧約聖書』における双子たち

2-1. 「エサウとヤコブ」

聖書に記されている双子物語でもっとも興味深いのは「エサウとヤコブ物語」（創世記 25～36 章）であろう。創世記の他の物語と同様、この物語の成立史は簡単ではない。本来の物語に、

『新約聖書』に登場する「双子」は、イエスの 12 弟子の 1 人トマスだけである。彼はヨハネによる福音書の 3 箇所、ニックネーム「ディデュモス（双子の片われ）」を得ている。（ヨハネ福音書 11:16、20:24、21:2）一方、ギリシア語「トーマス」は、アラム語に戻して表記するならば「トーマー」であり、その意味は「双子」である。つまり、「ディデュモスと呼ばれたトーマス」は「双子と呼ばれた双子」と訳されることになる。したがって、このキリストの弟子の名は本名ではなく、二つの言語によるニックネームだけが残されているわけである。

残念ながら、「聖書」に登場する双子はいずれも「男男」双生児であり、女兒の存在は見えない。

独立して存在していた複数の伝承や物語が組み込まれ、編集者による加筆等が施されているからである。たとえば、元来は「家族内部」の軋轢物語であったものが、後代に「民族間」の抗

争物語へと拡大されたとの見解がある。こうした「物語」の伝承・編集を再構成する提案は、研究史的に多く存在しており、それらを概観することは筆者の力量をはるかに超えている。したがって、ここではごく簡単な紹介にとどめざるを得ない。

「エサウとヤコブ物語」は、「イスラエルの民」の父祖アブラハムの孫たちのストーリーである。この双子は胎内いるときからすでに「押し合う」関係で、出産に際しては弟ヤコブが兄エサウのかかとをつかみながら生まれ出た、と言う。(創世記 25 章) その後、弟ヤコブは、「長子の特権」と父イサクの末期の「祝福」を、計略的に兄から奪う。(25、27 章) 特に後者では、ヤコブは兄エサウだけでなく、父イサクをも騙し、「祝福」を手中にし、一族の長となる。つまり、それぞれが代表する部族間の「神の祝福」をめぐる軋轢、すなわち民族的抗争(たとえば、土地!をめぐる)を前提としたプロットとなっている。

まず、エサウの名前からして象徴的である。エサウには「エドム」という別名が与えられているが、これはパレスチナの地名(民族名)である。また彼の身体的特徴「毛深い」(サアル)からは「セイル」という別の地名が連想される。また、双子でありながらエサウとヤコブは異な

った生産様式を示している。すなわち、エサウは狩猟民、ヤコブは小家畜飼育民である。したがって、彼らは隣接異民族を表象しており、「出し抜き」物語には文化史的に優位に立ちつつあった家畜飼育民の狩猟民に対する「嘲笑」が感ぜられる。古代人にとってもっとも大切な「長子権」を豆の煮物と引き換えに手渡してしまうことなど、実際にはありえないからである。

これら異民族は単なる兄弟や親子としてではなく、「双子」として描かれる。ここに今日的な意味を見出すことが可能である。「生存と勢力をめぐる争いの中での共存」(C. ヴェスターマン)が物語の中心テーマであるとするれば、文化的に優越な民の視点からの記述という問題点をていねいに洗い出しながら、競合状況にある隣接社会集団の共存を、彼らが本来「双子」であったというメッセージに結び付けて理解することが要請されるからである。最後に付言すれば、読者は、ヤコブの相続権の正統性について疑義を持つことが可能である。なぜなら、「長子権」と「祝福」の両者を彼は詐取したからである。

(この項は主に、Claus Westermann, *Genesis 12~36, A Commentary*, Minneapolis: Augsburg Pub., 1985. ドイツ語原著 1981. 抄訳版: クラウス・ヴェスターマン『創世記 II』教文館、1994 年、を参照した。)

付論: 「カインとアベル物語」について

「エサウとヤコブ物語」と同様に兄弟間の抗争を描くものに「カインとアベル物語」(創世記 4 章)がある。興味深いことに、物語の古層においては、この「カインとアベル」を双子と取る見解もないわけではないが、現在の形においては兄弟として描かれているので、本考では扱わないことにする。

ただ、一点指摘すれば、この物語の主人公カインは農耕民を、そしてアベルは牧畜民を代表している。そして更に、カインはイスラエルの隣接遊牧部族「ケニ人」を表象しているとの有力な説がある。農耕民カインが追放されて遊牧民となったと言うわけである。したがって、古層における「カインとアベル物語」は、生産様式を異にする隣接部族間の対立関係を兄弟の抗争物語として描いたものと理解することができる。(並木浩一『旧約聖書における社会と人間』教文館、1982 年、は極めて説得的である。)

2-2. 「ペレツとゼラ」

「ペレツとゼラ」の誕生物語は、族長物語の傍流である「タマル物語」の終結部である。こ

の物語は、筆者の目からすれば、いわゆる「恐怖のテキスト」の 1 つと捉えることができる。

「恐怖のテキスト」とは、アメリカ合州国のフェミニスト神学者フィリス・トリブルの用語で、ある特定の社会集団や個人が別の社会集団や個人を支配・虐待することを支持しているように読める聖書テキストを指す。(フィリス・トリブル『旧約聖書の悲しみの女性たち』日本基督教団出版局、1994年。 *Texts of Terror. Literary-Feminist Readings of Biblical Narratives*, 1984. トリブル自身は、この「タマル物語」を扱ってはいない。)

ヤコブには、側女を含む4人の妻がもうけた合計12人の息子がいた。その第4子ユダがカナン人のシュアとの間にもうけた息子がエル。エルの妻がタマルである。しかし、エルは「神」の意思に背き、殺される。タマルには子どもがなかったので、「レビラート婚」によって子孫を残さなければならなかった。レビラート婚とは、子どもを儲けることなく死んだ男の弟がその妻を娶り、子孫を残すことを義務とする婚姻制度である。エルの弟オナンは、こうした婚姻制度に反発。一旦はタマルと結婚するが、膣外射精をして「子種」をタマルに与えなかった。(因みに、「オナニー」はこの故事に由来する。) そのため、彼は殺される。次に義務を負う末弟シユラは幼かったので、結局「レビラート婚」は果たされない。

そこで、名誉が汚されると考えたタマルはある計略を実行する。すなわち、街頭娼婦に身を偽って義父ユダに接近、彼の子どもを宿す。後に妊娠が知られたタマルは姦淫を疑われるが、ユダと交渉を持ったときにユダの印章を手に入

れていたため、貞節が証明され、出産に至る。生まれた子どもは、果たして双子であった。

最初一人の子が産道から手を出したので、助産婦が赤い糸を手で結ぶが、その手は引っ込められ、別の子の方が先に出てきた。そこで、先に生まれた方が「ペレツ (出し抜きの意)」、後の方は「ゼラ (赤)」と名付けられた。このドロドロの物語は、子孫を残すことをあらゆる価値に先立つものとする「家父長制」に縛られた人々による悲劇と読める。

ところで、この悲劇が「出し抜き」によって閉じられるのは、どこへ読者を導くのであろうか? 岩盤のように固い「家父長制度」は、出産時に助産婦を困惑させた、せいぜい小さな「出し抜き」でしか抵抗されない、と言うのだろうか? それとも、出産という人生最初の瞬間から、二人して大人を「出し抜く」ようなたくましさ、そしてその母がしたようなしたたかさを描いているのであろうか?

『旧約聖書』は確かに、「恐怖のテキスト」に満ちている。しかし、その一方で、古代の暴力的で専制的な社会の中であって、それでもどっこい生き抜く人間ドラマが物語られているのも事実である。今日の読者に求められているのは、赤裸々に描かれたこうした「恐怖」を解放する方向でテキストを批判的に読むことであり、その中でなお生き抜いた主人公(その多くは女性)を記念することではないだろうか?



3. 『新約聖書』における双子

3-1. 使徒トマス

イエスには中心的弟子たちが12人いたと考えられている。いわゆる『12使徒』である。その一人トマスの名は、子の12人のリスト中、マルコ福音書版(3章)とルカ版(6章)では8番目、マタイ版(10章)では7番目に記されている。

トマスを「双生児研究」の関心から考察する意義は3点あると考えられる。第1は、トマス

が双子であるなら、その片われは誰か? そして彼は「兄」なのか「弟」なのか? という「なぜ」についてである。特に、トマスとイエスは双子であったという伝説は、すでに2世紀には成立しているとされているので、「双生児史」上看過することが出来ない問題となるのである。

1945年12月、エジプトのナイル河畔のナグ・ハマディで多数のパピルス本が発見された。い

わゆる「ナグ・ハマディ文書」である。これらは「グノーシス主義」と呼ばれる神秘宗教思想のコレクションで、その中に、2世紀中頃にコプト語で書かれた「トマスによる福音書」が含まれていた。(コーデックスⅡ) イエスの語録を中心としたこの福音書は、今日ではイエスの真正の言葉の再構成に不可欠な歴史資料と考えられている。

「トマス福音書」は次のように書き出される。「これらは、生けるイエスが語り、デドモ・ユダ・トマスが書き留めた秘密の言葉である。」それでは、この「(ギリシア語で) 双子・ユダ・(アラム語で) 双子」と記された人物は誰なのか？ ナグ・ハマディ写本には、トマスの名前が書かれたもう一つの文書『闘技者トマスの書』(3世紀前半)があり、そこではトマスが救い主(イエス)によって、「お前は私の双子の兄弟であり真の友である」と呼ばれている。(138・9) また、新約聖書の外典の一つ『トマス行伝』39(シリア語本文。3世紀半ば)でも「救い主の双子、至高者の使徒」と呼ばれている。つまり、トマスの名による一連の文書が「イエス双子説」を記したり、前提にしているのである。

実は、こうした「イエス双子説」は、2世紀前半の東シリアの教会(エデッサ教会)に遡ると考えられている。しかし、イエスが実際に双子であったとするのは歴史的には無理があるのではないかと。なぜなら、かなり早い伝承と考えられる「イエスの弟妹リスト」(マルコ福音書6章)と明らかに矛盾するからである。また、リストの中の「ユダ」がイエスの片われなら、なぜその名前が3番目に記されているのか？ さらに、福音書の多くはイエスが長子であることを前提に記しているように思えるからである。因みに、イエスに実の弟妹がいたことを教会として認めているのはプロテスタント教会である。ローマ・カトリック教会は従弟妹たちと理解し、東方正教会は弟妹たちのことをヨセフの連れ子と捉えている。(イエスの弟たちについては、H. シャンクス&B. ウィザリントンⅢ『イエスの弟 ヤコブの骨箱発見をめぐる』松柏社、2004年、原著2003年が抜群に面白い。)

そうすると、イエスとユダ・トマスが双子であると記される意味はどこにあるのだろうか？ 荒井献は「本来的『自己』を具現しつつそれを啓示するイエスと、『自己を知る者』の代表的存在としてのトマスがその本質を一つにするという意味があろう(この意味でトマスはイエスの双子の兄弟か)」(『ナグ・ハマディ文書Ⅲ』374~75ページ)と述べて、イエスとトマスの双子性を古代グノーシス思想による象徴的表象と理解している。これは妥当な解釈と思われる。

そこで再び、最初の問いに戻ることになる。すなわち、トマスの双子の相棒は本当は誰なのか？ しかし、イエスと使徒トマス、あるいはユダ・トマスが双子ペアであるとの言説をめぐる探求には目が離せないことは確かである。(この項の主な参考書：荒井献『隠されたイエス トマス福音書』講談社、1984年。J.S. クロップエンボルグ他『Q資料・トマス福音書』日本基督教団出版局、1996年、原著。荒井、大貫他訳『ナグ・ハマディ文書ⅠⅡⅢ』岩波書店、1997~1998年。)

次に、トマスの存在を後世に印象付けたエピソードについて考えてみたい。すなわち、ヨハネ福音書20章において、トマスは復活のイエスと重要なやり取りをしている。後世、「疑いのトマス」と呼ばれることとなったこの場面で、彼はイエスの復活を「疑い」、イエスの体に処刑時の傷跡を直接確かめるまでは信じない、と言い張る。次の場面で、トマスに顕現したイエスは、望み通り傷跡に手を触れて見なさいと呼びかけ、最後に「見ないのに信じる人は幸いである」との有名なフレーズを投げかける。

さて、この一連のやり取りをどのように解釈するかはかなり大きな問題である。現代の聖書読書において、「疑いの解釈学」ということが言われている。「疑いの解釈学」とは、アメリカの女性神学者エリザベス・シュスラー＝フィオレンツァが『石ではなくパンを フェミニスト視点による聖書解釈』(新教出版社、1992年、原著1984年)の中で提唱した聖書の読み方で、聖書読者(神学者や教会をも含む)の時代の制度

や思想によって規定された利己的関心がテキストやコンテキストの読みを形成してしまうことに、健全な疑いをもって解釈することを意味している。とりわけ、「聖書テキストと解釈とは男性中心的で父権制機能に奉仕するものだという想定を出発点とし、聖書における女性たちの失われた伝承と解放のメッセージを捜し求めて、聖書テキストとその解釈史の中をくまなく探す」ことである。(フィオレンツァ、55 ページ。一部、筆者要約。)

「疑い」はむしろ、人間を解放する知と実践の出発点である。したがって、復活のイエスが顕現した場所で、トマスが「疑い」を提示したことは意義深い。「復活」に対する「懐疑」を経た上で、イエスはトマスに人格的に出会い、そこで「信仰」に招くのである。そして、トマスは「わたしの主よ、わたしの神よ」と告白する。これは、キリスト教会の基本信条、「イエスはまことの人にして、まことの神」につながる極めて重要な宣明である。

このように、トマスは「懐疑＝理性」と「信条＝信仰」という近代神学の主要問題に関わる問題提起を行ったのである。

第3点は壮大な伝説に基づく。すなわち、トマスはインドまでの宣教旅行を敢行し、CE. 52年には南部の現ケーララ州に到着して、「マー・トマ教会」の創始者となった。しかし、72年に暴徒による殉教を遂げ、現タミル・ナードゥ州チェンナイ（マドラス）近郊に埋葬されたと伝えられている。こうした伝説は、前述の『トマス行伝』が記しているだけでなく、マー・トマ教会が千数百年の間、大切に保持してきたものである。マー・トマ教会の存在を歴史的に証拠付けるのは、325年のニカイア公会議の記録だと言おう。(HP：www.marthomasyrrianchurch.org/heritage.htm)

最後に、プロテスタント教会に属する筆者は「聖人信仰」を持たないが、それにしても「使徒トマス」が双子たちの「守護聖人」とならなかったことを不思議に思う。メディチ家の守護聖人は、コスマス (Cosmas) とダミアヌス (Damianus) という双子であった。しかし、双子たちのための聖人は見当たらない。聖人を持つ諸教会に属する双子たちよ、トマスを双子の守護聖人に！

使徒トマス自身が南インドまで到達したことを歴史的に証明できるかについては疑問があるが、少なくとも次の一点は確実であると思われる。すなわち、西洋キリスト教が到達する以前に南アジアにキリスト教が存在したということである。西洋キリスト教がインドに布教を行ったのは16世紀以降である。日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルも、1542年に南インドの東西両海岸地域で布教活動を行っている。しかし、それより少なくとも1200年以上前に、非ヨーロッパ形のキリスト教がインドに設立されているのである。

アジアの現代神学において、西洋列強の植民支配とキリスト教の関係をポスト・コロニアルな視点から考察することは中心テーマの一つである。その際、アジア諸国の独立運動を導いたナショナリズムからのキリスト教批判に誠実に応答することが重要な課題であった。そこで歴史の手がかりとなるのが、ヨーロッパ人による布教以前にすでにキリスト教がアジアに到来していたという事実である。この南アジアにおけるマー・トマ教会や諸地域におけるネストリウス派教会（たとえば、スリランカでは8世紀に遡る遺物が発掘されている）の存在が意味を持つ。すなわち、支配の野望を持たずに訪ねて来たキリスト教があったことを最初の手がかりとして、キリスト教の解放的側面をアジアの今日の文脈の中で展開して行こうというのである。このように「双子トマス」がインドにキリスト教を伝え、そこで定着し、殉教の死を遂げたとの伝承は、今日のポスト・コロニアルな視点から大いに評価されうる。スリランカのキリスト教会との小さな交流を続けている筆者としても、このことは同じ双子として誇らしく感じている。

平成 17年度第1回日本双生児研究学会幹事会議事録

日時 平成 17 年 1 月 22 日 12:05-13:00

場所 石川県女性センター

出席者：(敬称略 あいうえお順)

浅香昭雄、安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、小野寺勉、加藤則子、志村恵、杉浦祐子、
野中浩一、横山美江

欠席者 早川和生、又吉國雄

議題次第：

1. 平成 16 年度(2004 年度) の活動報告

1) 第 19 回研究会、第 20 回研究会について

第 19 回 5 月 22 日(土) 慶應義塾大学三田キャンパス

安藤寿康 (慶應義塾大学文学部教授)「コロラド留学記－出会った人々、考えたことなど」

第 20 回 12 月 18 日(土) 慶應義塾大学三田キャンパス

武弘道 (埼玉県病院事業管理者) 「多胎児の育児支援－620 組の経験から」

2) ニュースレターについて (第 35 号、第 36 号の刊行)

第 35 号を 6 月、第 36 号を 12 月に刊行した。

3) 会員状況報告

現在の会員数 163 名、新規 8 人、退会 5 人

2. 平成 16 年度の会計・監査報告

下記の通り報告し、会計監査監事の菅原ますみ会員より確認の報告がなされた。

3. 平成 17 年度の予算計画について

事務局の作成した原案にしたがい、以下のように決定された。

4. 第 19 回学術講演会について

大会長の志村恵会員(金沢大学)より報告があった。

5. 平成 17 年度の活動予定

1) 第 20 回学術講演会の準備状況について

野中浩一会員より 2006 年 1 月 28 日(土)に和光大学で開催される旨の報告があった。

2) ニュースレターについて

横山美江幹事より第 37 号、第 38 号が刊行予定であることが報告された。

3) 第 21 回研究会、第 22 回研究会について

1) 第 21 回研究会

Professor Nancy Pedersen(スウェーデンカロリンスカ研究所教授)

“The Swedish Twin Registry: Past, Present, and Future” (仮題)

・平成 17 年 2 月 12 日(土) 13:30

・慶應義塾大学三田キャンパス 大学院棟 2 階 325B 教室

2) 第 22 回研究会の講師は検討中である旨の報告がされた。

6. 第 21 回学術講演会 (平成 19 年) の開催地について

現在検討中である旨が報告された。

7. その他

・編集委員として新たに小野寺勉会員、志村恵会員が加わった。

平成 17年度第 2 回日本双生児研究学会幹事会

日時 平成 17 年 2 月 12 日(土) 15:45 から

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 大学院校舎 2 階 325B 教室

出席者：(敬称略 あいうえお順)

浅香昭雄、安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、小野寺勉、加藤則子、杉浦祐子、
野中浩一、横山美江

欠席者

早川和生、又吉國雄、志村恵

議題次第：

1) 秋の研究会(第22回)の講師について

9月あるいは11月にツインラインと多胎児メーリングリスト関連のテーマを取り上げる旨の申し合わせを行った。また第23回講師として菊地白会員(上尾中央総合病院)が予定されていることが報告された。

2) 学会 20 周年記念事業について

さまざまな可能性が検討された結果、該当する回のニュースレターにてなんらかの特別な企画を実施する案などが提案されたが、もう少し検討の余地があるため、次回に持ち越された。

3) その他

- ・医学中央雑誌、学術情報センターを通じて学会活動の紹介を積極的に行うことが提案された。
- ・Dr. Nancy Pedersen の講師謝金として2万円、またその紹介とニュースレター原稿作成に関わってくれた加藤憲司会員への謝金として1万円を計上することが提案され、了承された。



日本双生児研究学会 平成 16 年度(2004. 1. 1～2004. 12. 31) 会計収支報告

収入			支出	
前年度繰越		¥1,838,723	研究会謝礼	¥20,000
会費納入		¥436,000	講演者交通費	¥0
平成 10 年度分	1	¥3,000	事務・消耗品費	¥13,574
平成 11 年度分	1	¥3,000	会議費	¥18,900
平成 12 年度分	2	¥6,000	ニュースレター編集費	¥50,000
平成 13 年度分	3	¥9,000	ニュースレター印刷費	¥22,580
平成 14 年度分	7	¥21,000	事務局人件費	¥70,000
平成 15 年度分	15	¥45,000	通信費	¥62,110
平成 16 年度分	108	¥334,000	第 19 回大会開催費援助費	¥100,000
平成 17 年度分	3	¥9,000	会員名簿印刷費	¥0
平成 18 年度分	2	¥6,000		
受け取り利子		¥66	支出合計	¥357,164
			次年度繰越金	¥1,917,625
合計		¥2,274,789		¥2,274,789

以上、相違ありません。

監査 村石幸正

菅原ますみ

日本双生児研究学会 平成 17 年度(2005. 1. 1～2005. 12. 31) 会計予算案

収入		支出	
前年度繰越	¥1,917,625	研究会謝礼	¥30,000
会費収入	¥375,000	講演者交通費	¥20,000
105 人(163*0.65)*¥3000	¥315,000	事務・消耗品費	¥10,000
過年度分(15*¥3000)	¥45,000	会議費	¥30,000
利子	¥50	ニュースレター編集費	¥50,000
		ニュースレター印刷費	¥25,000
		事務局人件費	¥70,000
		通信費	¥50,000
		第 20 回大会開催費援助費	¥100,000
収入合計	¥375,100	支出合計	¥385,000
		次年度繰越金	¥1,907,725
合計	¥2,292,725		¥2,292,725

次回研究会のお知らせ

ツインメーリングリストや電話相談からみる多胎児育児の問題

2005年11月5日

慶應義塾大学三田キャンパス

小野寺勉氏と杉浦祐子氏



編集後記



うだるような暑さが続きますが、日本双生児学会の皆様方におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。この夏は、野口聡一さんがディスカバリーに搭乗し、宇宙ステーションへと打ち上げられ、多くのトラブルにもかかわらず、無事帰還されました。日本人もさまざまところで国際的に大いに活躍しています。

日本双生児学会も20年目を向かえ、本学会からもさらに多くの情報発信が国内外に向けてなされることを期待されるところです。会員の皆様今後ともご協力賜りますようお願い申し上げます。

横山美江

